

月乃出羽路

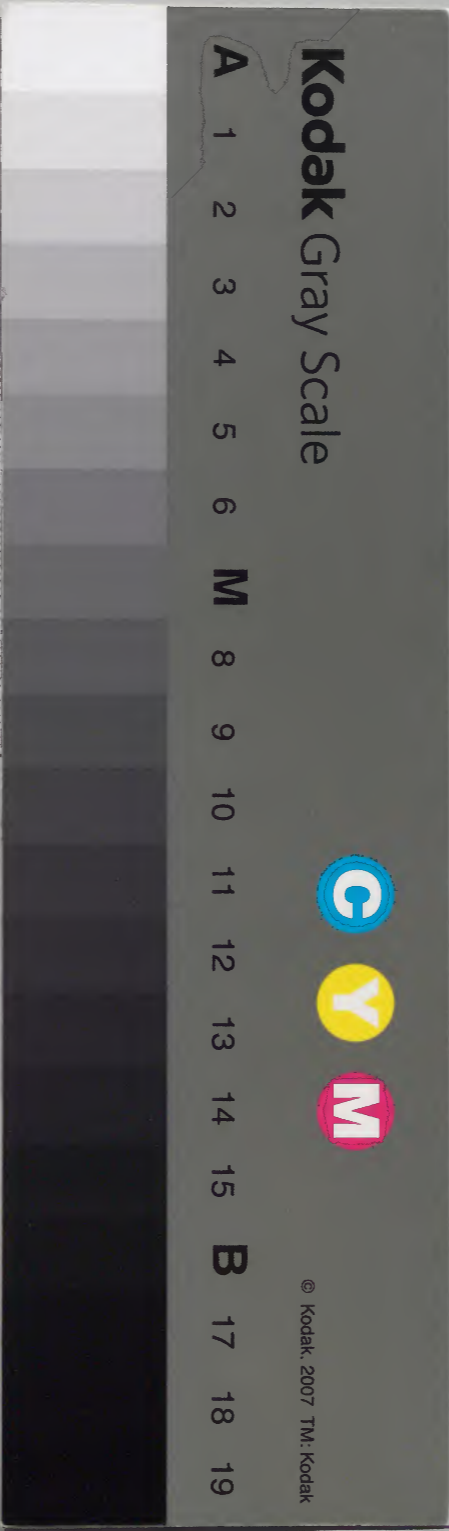
十八

			二九	和
		一	一五	書
		二	七	門
七	九	六	號	類
八	架	函		
冊				

庫	文	閣	內	
五	二			和
七	九			書
函	一			類
一	七			
八	八			
架	冊			

内一〇九七四號

内閣文庫	
番號	和 29157
冊數	78 (58)
函號	177 901



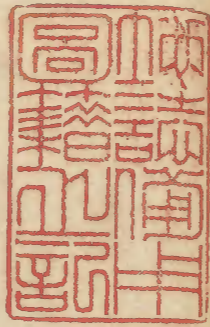


○あまがれにこそ申

○十の巻

全漢の跋ひよのりてのいふる者みは太平記といふ大の書あり
る。寛文二年以後の年記の刊板あり。画巻物の辭あり
塙檢校保已一集。群書類表中の漢字記と画を本とし
合せしむる。一ぬきあはれなる所を辨字も多し。むらさ
きよきとては。版考のりては。画あり。けしん

内一〇九七四號



○奥州後三年記序

群書類聚中 埼検校保己一集校本

朝家小支武北二道ありたひよ政理茂扶く山門小顯密の雨宮
あく護持を致是聖代明時の洪業ありて神明佛陀の余化ふ
あつたといふとあしとるに孝彰神武天皇五十六代清和天皇は御子皇統
親王六代の後胤伊豫守源頼義朝臣の嫡男陸奥守義家朝臣
八幡殿と号に堀川院御宇永保三年に奥州の任ふ赴く。爰のあつたに
奥六郡を領せし鎮守府將軍清原武則の孫荒河太郎武貞の子真
衡が富有り奢過分の以臨するに。一族あり。郎従とあまつし秀武
ふも。いふとあつた合戦といふ。且倅殃廣ま及てはひふ武衡
家衡とせあつたに大軍あつたとはくし。勇士名代あつた。戦ひその
ふとあつた。世間ふ大將軍陸奥守北武徳威勢上代つとふ稱あり



群書類聚中

所謂雪れ中人とありむ。仁心。湯和の氣膚の少と。雪れ外
雁とあり。智恵。天柱の才。自當の或。士率。剛膽の産。まうり
とを。とて人。と。と。け。ま。あ。ひ。凶。徒。没。落。の。期。事。と。て。こ。こ。と
志。の。以。何。て。寛。治。の。年。十。月。廿。四。夜。大。敵。を。て。滅。亡。し。て。殘。黨。あ。り。と
誅。子。仇。を。子。孫。解。状。と。勤。之。孝。圖。敵。感。を。ま。う。は。し。借。味。を。と。れ。と
八。幡。殿。の。後。三。年。此。軍。と。格。を。早。雲。い。わ。わ。り。あ。り。魯。風。も。は。佳。名。い
朽。多。り。源。流。層。く。施。之。今。ふ。い。う。え。又。孫。新。あり。古。来。此。美。款。詠
其。威。徳。と。仰。が。ゆ。ん。世。の。あ。ま。と。と。わ。揚。け。す。急。は。法。を。示。さ。ん。り。と
思。ふ。後。漢。此。子。八。將。を。形。と。流。雲。臺。ふ。寫。を。奉。給。賢。臣。陪。子
名。を。世。衣。殿。の。圖。せ。り。故。ふ。今。世。務。と。細。わ。り。む。あ。り。と。こ。こ。り
の。身。由。の。つ。き。て。世。畫。面。東。塔。南。谷。此。象。議。と。て。其。切。と。終。ふ。狂。言



戲論の端とあり。兒童幼學れ心とあり。鑿仰の意中時と
是と按きて。永日。困。夜。の。寂。寞。と。あ。く。と。の。家。卿。の。望。れ。外。よ。も。く
こ。こ。と。の。あ。ま。び。て。嘯。風。呼。月。の。吟。詠。あ。海。を。え。と。る。後。嘉。精。微
の。ゆ。り。と。丹青。の。花。春。常。に。は。り。能。筆。絶。妙。の。姿。金。に。銘。古
小。龍。の。波。是。景。意。あり。花。少。好。あり。感。せ。と。め。也。于。時。自。和。と
年。治。印。後。信。郎。書。意。一。谷。の。表。常。に。て。大。綱。の。小。序。と。記。と。あ。と。と。り。

○奥州後二年記上。

永保のころ奥六郡がうら。清原真徳らあり。荒河太尉武光
子。鎮。守。將。軍。武。知。の。孫。を。の。傲。と。と。本。羽。と。山。北。の。任。人。なり。
康平此ころ。ひ。源。頼。義。自。任。宗。任。と。ち。時。武。知。一。百。餘。人。の。勢。道。を
師。す。あ。り。は。あ。り。て。自。任。宗。任。と。ち。あ。り。ひ。け。を。と。こ。れ。よ。う。て

あはれとてあちううううの事あるとてあをあらうひびきを
あをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを

永保二年の秋保義家朝長陸奥守よりなるはさうぶらうぶら
あはれとてあちうううの事あるとてあをあらうひびきを
あをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを
あらうひびきをあらうひびきをあらうひびきをあらうひびきを

謀及まごみ負任宗任の過をわづかの力とてあはれくろあまひく
ぐりるを降るもや追討の官符をあるいづく首を京をまきん
中をたぬるもさうれ故あるやあはれ官符をたぬりて勤賞あこ
あつたて何て官符あつたうさうさうさうさうぬとあはれ首と道
捨てむろくまのあまふさうさうさうさうさうさうさうさう

寛文本卷末

○此記不知何人作也。備史君平宰相忠雄御所藏本圖
記三卷上卷土御門文殿寄人仲直中卷持明院在將保備下
卷世尊寺從三位行忠各寫其詞焉。圖則畫工飛彈守惟久の
筆也。予得偶見、右欣賞、寫而留焉。其間假字遣等一
隨其本、真字以真字寫、假字以假字寫、不更字

而又一校了、須為證本也。然彼以假字交中行字、此以
片假字交真字、唯是之換耳。
此記詞簡古、而理較著、人僉曰平家物語下出太平記、
上予於此記亦云出平家上、然只讀至拔十任之吉、踏
武衡之頭、暴刑有害道義、所不滿于予心也。
此記卷首舊本已脱、惜矣。史之闕文也、而今欲補、叵獲
它本、姑、埃、異日冷閣之士之為焉、云、余と見也。

畫卷物の辞乃末

以上小場氏家人所藏享保某年所模写圖式在所詞書以
畫之、以下村瀨君續京師、齋未、圖抄、跋文、舊跋、
右後三年軍記書画三卷者、播磨宰相、
池田彦北方

源善字子東照君之所持而彼家奕世之珍藏也

之御女号良正院玄孫右衛門督吉明朝臣恐其久而敗壞也今茲元祿十

四年辛巳冬十月就京師而修補焉有故許供

天覽聖感不虧寔可謂希世之勝寶矣修補功成請于

余欲錄其事以遺後裔余不獲辭遂書以贈之

元祿十四年辛巳冬十月下旬 特進基時誌

奥州後三年記三卷以酒井雅樂頭殿藏本令寫之旅
詞書者以他本挿入畢

明和七年庚寅六月 從四位下若狹守宗直

○仲直字多原氏時方後 後嵯峨院上北面對馬守從五位上

上北面文殿寄人治部大輔細工所別當從四位上

○仲朝 ○仲直 清宣 時代不合

○仲盛能登守從四位下 ○仲雄 ○仲尚 ○仲基後嵯峨院上北面

○親直

○保脩 道長公二男 賴宗後 保有持明院正二位權大納言

貞治元年出家 保脩左中將正四位下 早世

○保定 能書 從四位下 左中將 女子 後醍醐院典侍

○保冬 正三位權中納言 明德三十六 薨 保道 孝山若清氏室

○行忠 伊尹之後 經尹 延慶三年出家 行尹 ○行忠

○經有 女子 後醍醐院勾當内侍 新田義貞室

○伊能 行俊 行豊

○惟久 重氏 師氏 師直 高武藏守

○頼基

○惟基 惟久 左衛門 師直 同時三入 重久 左衛門

○重祐 兵庫助 忠氏

○好京録 乾卷 書画部 四十四葉小

○後三年軍記

三卷画記 彈守 惟久書 上卷土御門文殿寄人 仲直中卷 持明院左少将保脩下卷世尊寺

從二位 行尹卿 原本序迄 傳寫之本 序云 貞和三年法印

權大僧都 玄慧序 畫力精好事 古ヲ微スベシ

とんきり 今の画巻物と上巻下巻の傳に中巻關する

とむをき事にしてあるは

○金澤後三年合戦之圖

世圖之レ之保田 後藤源多衛 祐亮の所記之をいふと 此は 筆 なるに 形 存之世に 畫巻物と云ふ 上中下三巻あり 中の下巻に 關する なが中 金巻と云ふと云ふは 此の圖を撰ぬき 其入形 あり 土地の留るるを以て 宿と云ふなり 平鹿部横子なる 西宮丹波 正興之を此に 精好と云ふ 原本より及ぼすところの 幅を是れ 正興の所記に 依つて 筆を 寫す 依つて なるは 亦多岐之比と云ふ ことあり 是れなり

三河國 伴治郎 惟俊 惟助 兼 事

○三河國 伴治郎 惟俊 惟助 兼 事

三河國 額田郡の 伴治郎 惟俊 惟助 兼 事 伴氏あり 甚だしく

岸田の世の事ありしかども、
あんとし、（一）の道は、
あんとし、（二）の道は、
あんとし、（三）の道は、
あんとし、（四）の道は、
あんとし、（五）の道は、
あんとし、（六）の道は、
あんとし、（七）の道は、
あんとし、（八）の道は、
あんとし、（九）の道は、
あんとし、（十）の道は、
あんとし、（十一）の道は、
あんとし、（十二）の道は、
あんとし、（十三）の道は、
あんとし、（十四）の道は、
あんとし、（十五）の道は、
あんとし、（十六）の道は、
あんとし、（十七）の道は、
あんとし、（十八）の道は、
あんとし、（十九）の道は、
あんとし、（二十）の道は、
あんとし、（二十一）の道は、
あんとし、（二十二）の道は、
あんとし、（二十三）の道は、
あんとし、（二十四）の道は、
あんとし、（二十五）の道は、
あんとし、（二十六）の道は、
あんとし、（二十七）の道は、
あんとし、（二十八）の道は、
あんとし、（二十九）の道は、
あんとし、（三十）の道は、
あんとし、（三十一）の道は、
あんとし、（三十二）の道は、
あんとし、（三十三）の道は、
あんとし、（三十四）の道は、
あんとし、（三十五）の道は、
あんとし、（三十六）の道は、
あんとし、（三十七）の道は、
あんとし、（三十八）の道は、
あんとし、（三十九）の道は、
あんとし、（四十）の道は、
あんとし、（四十一）の道は、
あんとし、（四十二）の道は、
あんとし、（四十三）の道は、
あんとし、（四十四）の道は、
あんとし、（四十五）の道は、
あんとし、（四十六）の道は、
あんとし、（四十七）の道は、
あんとし、（四十八）の道は、
あんとし、（四十九）の道は、
あんとし、（五十）の道は、
あんとし、（五十一）の道は、
あんとし、（五十二）の道は、
あんとし、（五十三）の道は、
あんとし、（五十四）の道は、
あんとし、（五十五）の道は、
あんとし、（五十六）の道は、
あんとし、（五十七）の道は、
あんとし、（五十八）の道は、
あんとし、（五十九）の道は、
あんとし、（六十）の道は、
あんとし、（六十一）の道は、
あんとし、（六十二）の道は、
あんとし、（六十三）の道は、
あんとし、（六十四）の道は、
あんとし、（六十五）の道は、
あんとし、（六十六）の道は、
あんとし、（六十七）の道は、
あんとし、（六十八）の道は、
あんとし、（六十九）の道は、
あんとし、（七十）の道は、
あんとし、（七十一）の道は、
あんとし、（七十二）の道は、
あんとし、（七十三）の道は、
あんとし、（七十四）の道は、
あんとし、（七十五）の道は、
あんとし、（七十六）の道は、
あんとし、（七十七）の道は、
あんとし、（七十八）の道は、
あんとし、（七十九）の道は、
あんとし、（八十）の道は、
あんとし、（八十一）の道は、
あんとし、（八十二）の道は、
あんとし、（八十三）の道は、
あんとし、（八十四）の道は、
あんとし、（八十五）の道は、
あんとし、（八十六）の道は、
あんとし、（八十七）の道は、
あんとし、（八十八）の道は、
あんとし、（八十九）の道は、
あんとし、（九十）の道は、
あんとし、（九十一）の道は、
あんとし、（九十二）の道は、
あんとし、（九十三）の道は、
あんとし、（九十四）の道は、
あんとし、（九十五）の道は、
あんとし、（九十六）の道は、
あんとし、（九十七）の道は、
あんとし、（九十八）の道は、
あんとし、（九十九）の道は、
あんとし、（百）の道は、

竹石弓の圖畫卷（一）、（二）、（三）、（四）、（五）、（六）、
佛郎機（七）の如（八）、（九）、（十）、（十一）、（十二）、（十三）、
こゝろえを（十四）、（十五）、（十六）、（十七）、（十八）、
弓之辨（十九）、（二十）、（二十一）、（二十二）、
萬の兵（二十三）、（二十四）、（二十五）、（二十六）、
敗走（二十七）、（二十八）、（二十九）、（三十）、
鼓吹（三十一）、（三十二）、（三十三）、（三十四）、
源將軍（三十五）、（三十六）、（三十七）、（三十八）、
と見え（三十九）、（四十）、（四十一）、（四十二）、
も見え（四十三）、（四十四）、（四十五）、
銃砲（四十六）、（四十七）、（四十八）、
銃砲（四十九）、（五十）、（五十一）、
銃砲（五十二）、（五十三）、（五十四）、
銃砲（五十五）、（五十六）、（五十七）、
銃砲（五十八）、（五十九）、（六十）、
銃砲（六十一）、（六十二）、（六十三）、
銃砲（六十四）、（六十五）、（六十六）、
銃砲（六十七）、（六十八）、（六十九）、
銃砲（七十）、（七十一）、（七十二）、
銃砲（七十三）、（七十四）、（七十五）、
銃砲（七十六）、（七十七）、（七十八）、
銃砲（七十九）、（八十）、（八十一）、
銃砲（八十二）、（八十三）、（八十四）、
銃砲（八十五）、（八十六）、（八十七）、
銃砲（八十八）、（八十九）、（九十）、
銃砲（九十一）、（九十二）、（九十三）、
銃砲（九十四）、（九十五）、（九十六）、
銃砲（九十七）、（九十八）、（九十九）、
銃砲（百）、

西廣葉葉前より物を似る。南部路を以て的のりつとて道を
 くらへ賭ウラモの合をくぬ如あり軍器者、弩弓之辨、弩の創して
 於保由美と克今弩弓といふ義、謠うやとて。神功皇后の制作
 出て中古隆興出羽豊岐對馬長門因幡伯耆出雲石見等
 邊要の地、弩師と置して、常ニ教おつゝの始、をえされど
 後代其制を失ひ、今を異朝の弩、倣ひて作まつをえする
 性イヒシ在の石弓よふといふや、のや、の圖ウタをえれ、石弓と附て
 あまふ、石車クハ柁コシといふ物の類ひを、其、海波ナガリ、綿イト、巻マキ、葉ハ、礮カサネのごと
 あ、む、と、ま、し、と、ま、つ、る、を、ま、つ、る、を、ま、つ、る、と、ま、つ、る、か、げ、あ、つ
 ち、ま、つ、る、は、し、ま、つ、る、を、ま、つ、る、と、ま、つ、る、今、も、童、の、石、弓、と、ま、つ、る
 ま、つ、る、と、ま、つ、る、を、ま、つ、る、と、ま、つ、る、

洋次郎助兼。

石弓小中。

るまじり

兎飛

ちり

ちり



武衛。家衛が陣。
 遠くをのぞく
 矢をよそ
 近きをば。こゝれを射
 石をせりおす。
 岸高くして
 壁のごとく
 城の中へ行く
 川を渡る
 又えさる



相模の國住人鎌倉権五郎

景正とよとのあり。

先祖より受け高は

佐とよのあり。

十六歳よりして

おやいづさの前

命をすて 在り

そとふ

左の目を射たせ

其矢を折

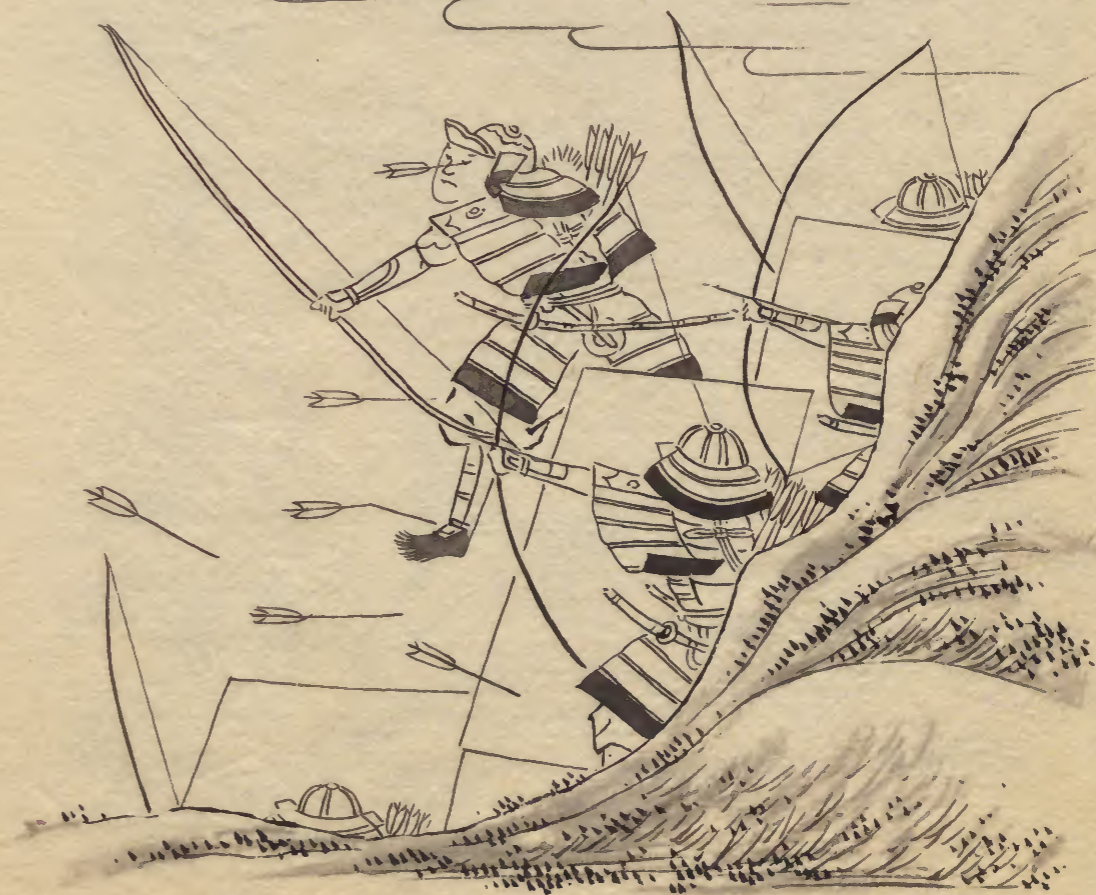
りけらうら當の矢を

返して敵とらう

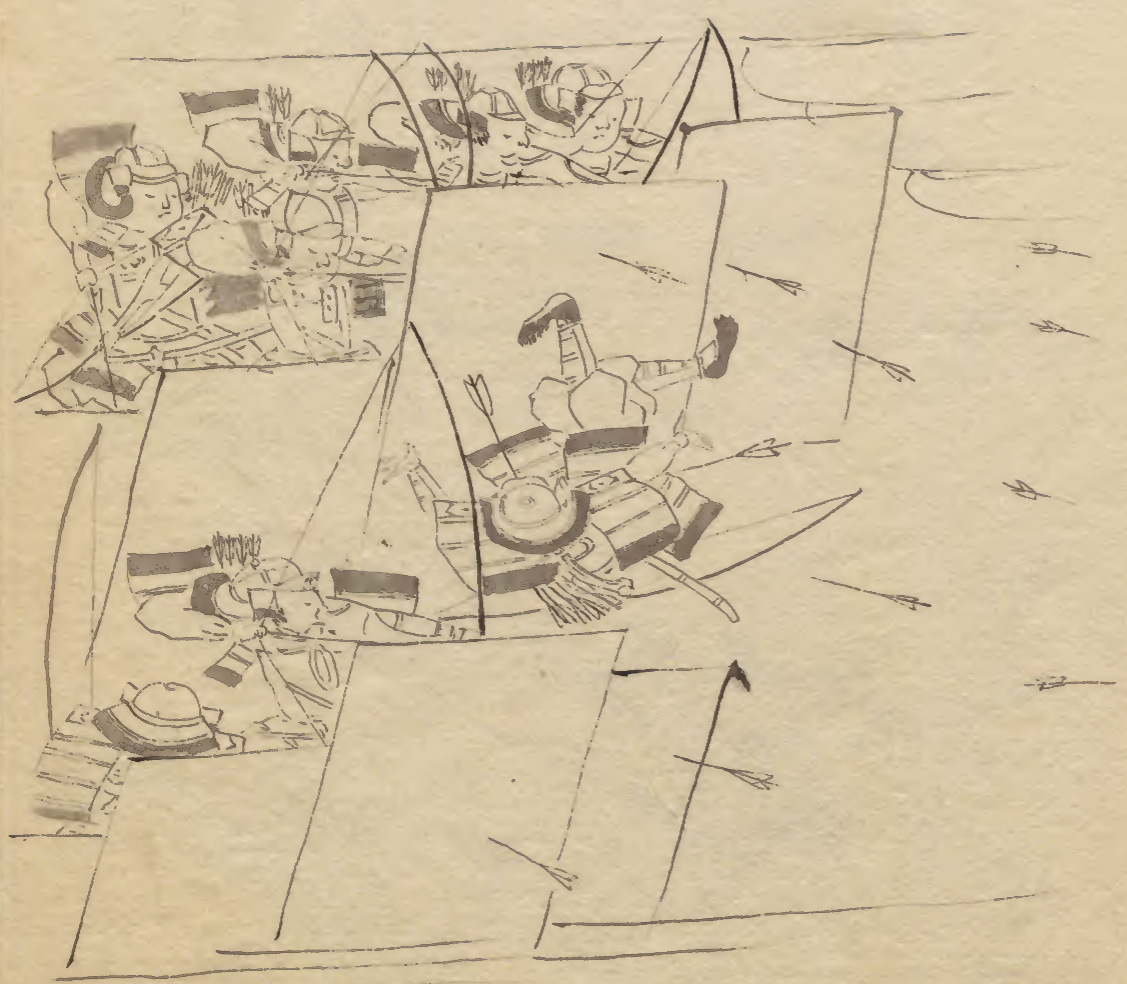
今と残さ権五郎

高名塚として大杉生ひ

う



57



〇雪のあつてく〜
 かのやうにせ〜一行の
 斜雁のよをよ〜
 雁陣のよをよ〜
 中あけ〜
 將軍の
 走見〜
 兵士〜
 ぬ〜む〜あ〜の〜
 叢の中〜
 三子館跡の兵士
 手づみえ〜



〇武衛
 將軍の兵
 是を討つ
 散と
 兵士〜



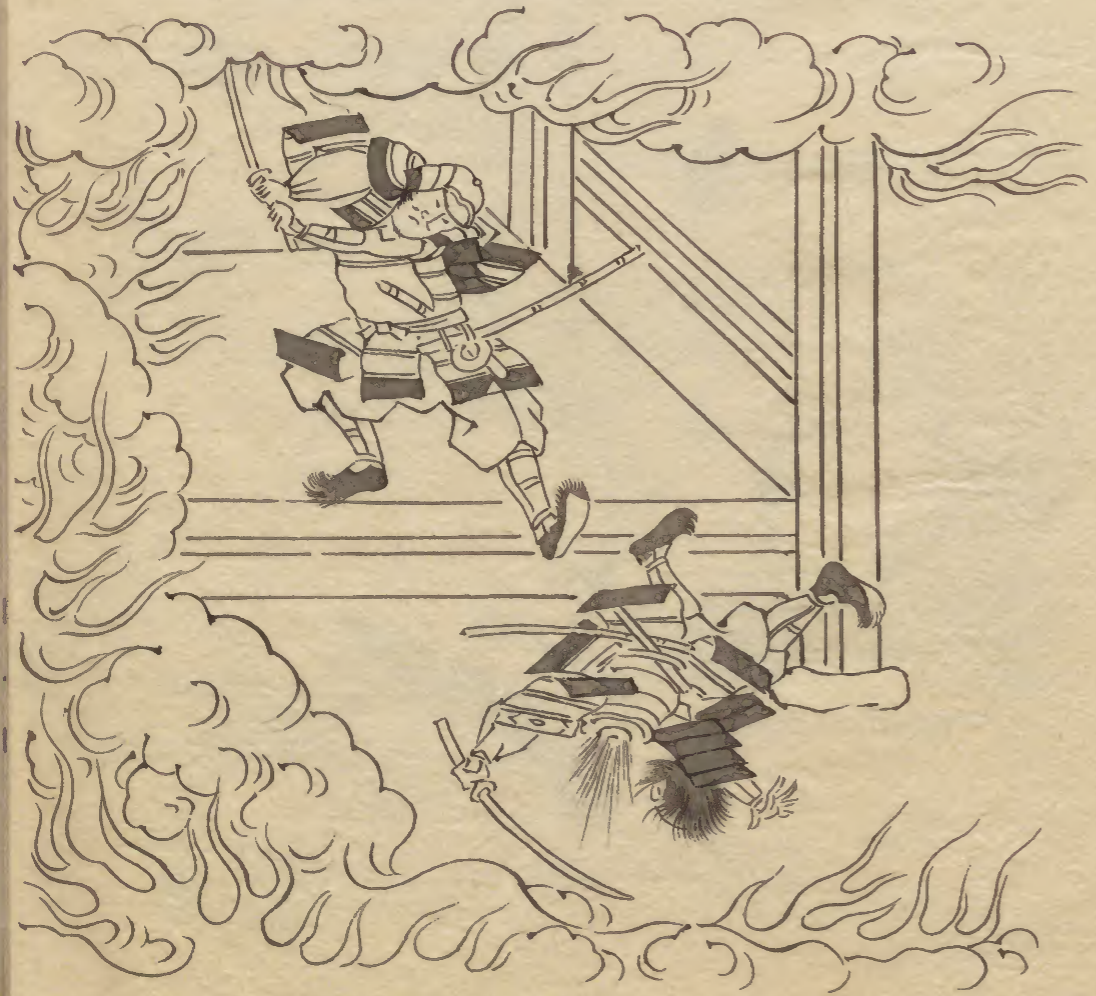




其伏兵
ありし地々。
甘部より
唐部より
世帯中も
大杉生る所
塚あり
三十餘騎の
兵等の
死骸七
後人集り
塚せし
今もあそび
三日あそび
あそび



武衛家衛食物ことごと
 つまらぬ寛治五年
 十月十四日此夜
 ほしふる
 おつらぬ
 城中
 家ととも皆火と
 ほろろ
 うつの中よ
 かめだの
 事
 地獄の
 こと
 今こそ世に
 焼米
 金津山よ
 堀



城の中の美女ととて、兵であらそひ
 陣の中へおく
 男のわらふを
 鋒さされく
 先さや
 かなあふと
 たうう
 あうおひく
 之
 そのせれあれ
 ちよんく
 こそれ
 へう



家衡を
 花柑子
 六郎
 是と
 愛は
 妻子
 過す馬を
 敵の
 つり
 射とつ



武衡逃く城中の池ありて

少ひ入りて水に志つて海をくまむら

かくしをる兵もいそみづはく

らむともしむはひはるつて

池より引出して

城中の池とては蛙藻沼

そは沼をうむ

そはう

本磨の跡あり

山畑とては

見ゆれ

武衡 蛙藻沼

引出され

生房

せれ

う





○義家將軍

武衛とせえ給ふ

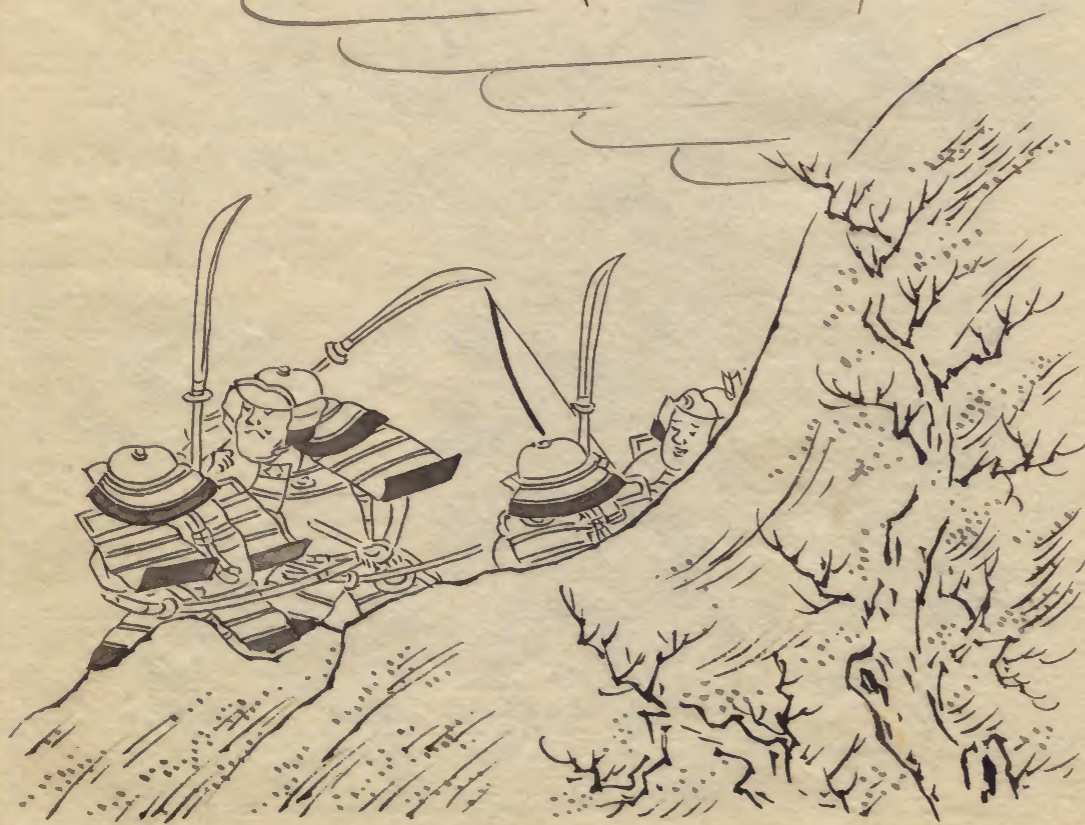
まをひらりてと

地まつけと

敢て目と

りてと

千任磨とめし出し
 先日矢倉の上より
 いひ事なき今や
 てむや
 といふ千任
 ううを
 毎路く
 いふ



備仗大宅光房
 ありせし
 その頭を
 斬り
 せむ





本が枝小つて
巧もてく

足で地をばけりて

あゝのまゝ

武衛が首を

おけり

千任おく
巧をばめて

是とす

あはれ

あつらひ

あはれ

ほひまゝの首を

あはれ



縣小治郎次任。

家衡をくちね

將軍これと

あはれ

あつらひ

あつらひ

あはれ

次任

あはれ





上馬一疋十鞍をさすむ

家むらぎ首として

やあつとれー

義家あまの

うはらふ

これ

さあつと

つとれ

次任が

郎等。家衛が首と

銚

もさす

縣殿の

さすははとひひ

みちたつと

つとれ

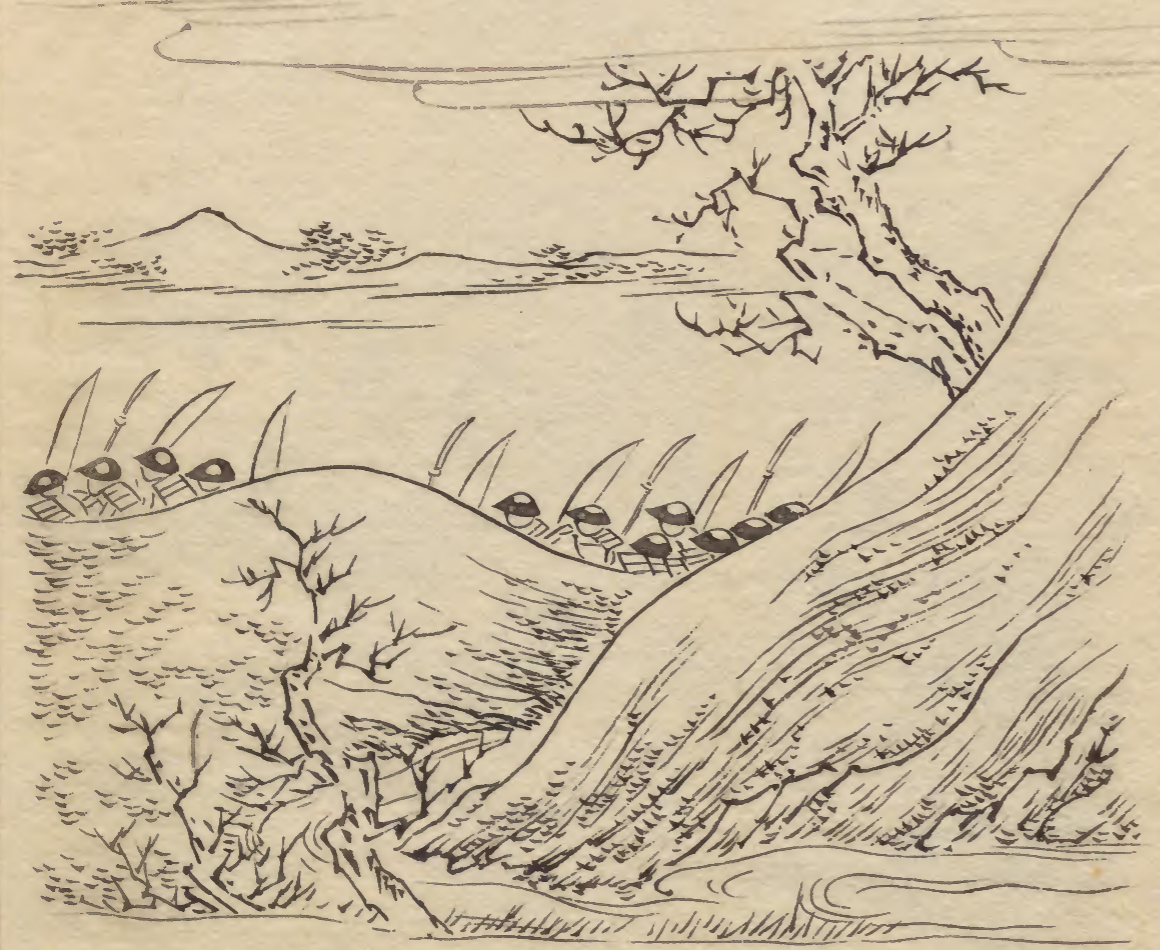
さす

とあつと





將軍國解をやりて
 武衛家衡の謀及本下
 貞行宗任の過す。
 日ごろの力をいそいで。
 追討の
 官符と
 首と都小
 きて
 ちんちん
 と
 せん

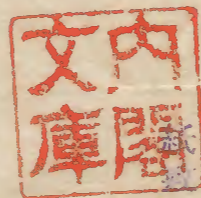


武衛家衡が
 郎等
 四十八人が
 將軍の前へ
 つけ





あれどもいふに
 歌よ一々田
 官符を給ふ
 世にさうかたの
 仍て官符を
 けり
 せん
 首之道不捨
 心可く
 此の
 云



三十五

